

## 自らの学びに明確な目的意識をもつ言語活動を通して、 活用できる言葉の力を育てる国語科の学習

### I 国語科研究の方向性

#### 1 主題設定の理由

新学習指導要領では、知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成することが求められています。具体的には「主体的・対話的で深い学び」の実現という視点から授業改善の取組を進め、学習の質を一層高めていくことが重要となります。学習指導にあたっては、〔学びに向かう力，人間性等〕を原動力とし，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕が相互に関連し合う学習過程の構築が必要です。

前研究では「自らの言葉を探究する言語活動を通して、言葉の力を高める国語科の学習」を目指して進めた研究の結果、「全国学力・学習状況調査 国語」(H29～R1)の全問題で全国正答率を上回るなど、児童の言葉の力が高まっている一方、相手や目的等に応じて言葉の力を発揮することには課題が見られます。同調査(R1)の「国語1三 目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書く」などに課題が表れています(本校：37.0%，全国：28.9%)。

全体研究で目指す「探究する子供」は、先述した学習過程が子供たちの主体性によって構築された学びを通して育成されるものと考えます。そのような前提に立ち、国語科では「相手や目的等が明確な言語活動において、自らの思いや考え、意図をもち、『知識及び技能』と『思考力，判断力，表現力等』を相互に関連させながら伝え合い，(自分なりの)答えにたどり着き，分かったことを次の言語活動や他教科・他領域の学習，日常生活で活用する子供」と考えます。

そこで、研究主題を「自らの学びに明確な目的意識をもつ言語活動を通して、活用できる言葉の力を育てる国語科の学習」と設定しました。「自らの学びに明確な目的意識をもつ」とは、言語活動及び学習内容に児童自身が「追究したい」という意識をもつことです。「活用できる言葉の力」には、「学習の基盤となる」国語の資質・能力を，单元内だけではなく次の言語活動や日常生活，他教科・他領域で活用できる力として育みたいという願いを込めています。

#### 2 目指す児童の姿とその具体

**既習の内容を基に学習の見通しをもち，言葉を問い直したり思いや考えを広げたりしながら言語活動に取り組むことで，活用できる言葉の力を獲得しようとする児童**

「既習の内容等を基に学習の見通しをもち」とは、言語活動における①目的や意図，②相手や場面，③活用可能な既習事項，④身に付けたい力について見通しをもつことです。「言葉を問い直したり思いや考えを広げたりしながら言語活動に取り組む」とは、理解や表現の適切さについて言葉を吟味したり、「これも伝えたい。」「この場合はどうかな。」など、試行錯誤しながら粘り強く言語活動に取り組むことです。「活用できる言葉の力を獲得しようとする」とは、各单元での学びを結び付けて新しい気づきを得たり，次の单元で生かそうとしたりすることです。

## Ⅱ 研究内容の具体

### 1 自らの学びに明確な目的意識をもつ言語活動の設定と遂行

言語活動を、「相手や目的等が明確な言語活動」にし、探究型の学びにするためには、既習の内容や、他教科・他領域との学びをつなぐことが効果的です。そのためには、全学年を見通した教材分析や言語活動の設定の仕方を考えると同時に、言語活動との出会いの場面で学習の見通しをもたせたり、「単元を貫く大きな問い」と、「それに迫る足掛かりとなる小さな問い」の組合せを考えたりすることが大切です。ここでは、言語活動を、自らの学びに明確な目的意識をもつ活動にするための手立てについて明らかにしました。

#### ○自らの学びに明確な目的意識をもたせる教育課程の在り方

- ・ 学びの履歴と系統を踏まえた教材及び単元の分析、年間を概観できるページ作り

#### ○言語活動の設定の工夫と出会いの工夫

- ・ 児童にふさわしい「文脈」の設定、「目的や意図」「相手や場面」「活用可能な既習事項」「身に付けたい力」について見通しをもたせる出会いの工夫

#### ○大小様々な問いと共に進む単元構成の工夫と問いを生む工夫

- ・ 児童自身の問いや違和感を大切にしたり、意図的にうまくいかない場면을位置付けたりすることによる、切実感のある学び

### 2 問い直す過程の質を高める手立ての工夫

問い直す過程の質を高めるためには、教師の明確な意図の下、「本当にこうかな。」などと児童が言葉を問い直す場면을位置付けていくことが大切です。そこで、確実に自分の考えをもたせた上で思いや考えを広げたり、試行錯誤したりしながら、問い直す過程の質を高める手立てを次のように具体化しました。

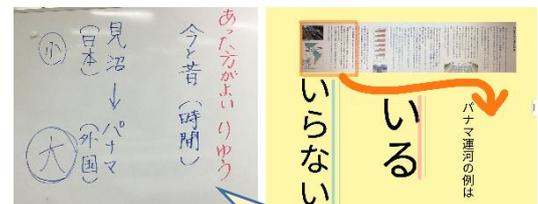
#### ○問い直しや試行錯誤を支える手立ての具体化

- ・ 確実な考えの形成に資する発問（選択型「どちらかな。」「どれかな。」）
- ・ 思考を焦点化する思考ツール、ノートの活用
- ・ 俯瞰できる既習教材の提示（比較させたり分類させたりする）



【既習教材を分類している例】

【選択型の発問により、考えを形成している例】



俯瞰できる既習教材の提示により、学びを確かめたり、新たな視点で教材を捉え直したりすることができる。

選択型にすることにより、まずは自分の考えをもち、そう考えたり感じたりした理由について深く考える。

### 3 活用できる言葉の力を育む評価

「活用できる言葉の力」を育むためには、児童の学びを見取りフィードバックすることが大切です。また、児童が育んだ能力を児童自身が実感することも「活用できる」という視点では大切です。そのために、ここでは評価規準の具体化や、児童の振り返り方についての工夫について明らかにしました。

#### ○評価規準と指導の手立ての具体化

- ・ 評価規準を、言語活動を遂行している姿として具体化し、児童に対する手立てを想定する

#### ○ポートフォリオと振り返り

- ・ 問い、探究の仕方、結論を振り返る（学びの調整能力を育て、粘り強い取組を生む）
- ・ ノートの活用、1枚ポートフォリオ等のワークの活用
- ・ 単元内の学び、単元間の学び、日常生活や他教科・他領域の学びへの展開方法

#### < 2年次研究の重点 >

- ・ 大小様々な問いと共に進む単元構成及び問いを生む工夫
- ・ 活用できる言葉の力を育む指導～既習と未習をつなぐ学び、指導事項の活用

### Ⅲ 研究実践

#### 3年生実践 「図や写真と文章を、むすびつけて読もう（『川をさかのぼる知恵』）」

実践のテーマ：既習の内容に戻る必然性の中で、段落相互の関係に着目しながら、文章の構造や特徴に気付く学習

#### 1 研究授業のねらい

本単元は、図や写真と文章を結び付けて読むという言葉の力の育成をねらいとしました。見沼通船堀に見られる川をさかのぼる仕組みは、文章を読むだけでは理解が難しく、図と文章を結び付けて読むことの効果を一層実感することができると言えます。また、図や写真の効果を考えることに留まらず、説明文の構造や特徴について考えたり、体系化したりすることを目指しました。

そのために、図や文の一部を削除して提示し、図の効果や文章の構造及びその意味について思考する活動を設定しました。また、その中で既習の説明文と比較したいという思いをもたせたり、比較することで、書き方の順序や事例の扱い方などの特徴について、理解が深まったりするよう発問を工夫しながら学習を進めました。

#### 2 単元の指導計画

★＝記録に残す評価

時間	学習内容・学習活動	児童の姿・評価規準及び方法
①	<p>展開1：単元及び学習の課題①と出会う。—図と文章を結び付けて読む—</p> <p>◇説明文(図を切り取った文章だけのもの)を読む。 文章に合う図を入れよう。</p> <p>◇内容に合う図を考える。 ・説明文における図の効果について考える。</p>	<p>説明文における図や写真の効果を実感している。</p> <p>観察・ワークシート・図への書き込み 〔知・技②〕図と文章の結びつき、順序などの関係に注意して読むことで、正確に内容を理解しながら読んでいる。★ 〔態度①〕図の効果や、文章との結びつきを捉えようとしている。</p>
②	<p>◇図と文章を結び付け、より正確に内容を理解する。 文章から分かることを図に書いたり、図の順番を考えたりしよう。</p>	
③	<p>展開2：学習の課題②と出会う。—説明文の構造や特徴に気付く—</p> <p>◇全文を知り「はじめ・中・終わり」を捉え直す。 ・2つの事例で説明文が終わる構造に違和感をもつ。 「終わり」の筆者になろう。</p>	<p>説明文を比較したり分類したりすることを通して、本教材の構造や特徴を捉えている。</p>
④	<p>◇説明文の書き方について、比較しながら捉える。 これまでの説明文の「終わり」を参考にして書いてみよう。</p>	<p>観察(カードの操作等)・ワークシート 〔思・判・表②〕『川をさかのぼる知恵』の内容や、説明文全体の書かれ方に着目して、感想や考えをもっている。 〔知・技①〕主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語と接続する語の役割、段落の役割について理解している。 〔思・判・表①〕段落のつながりを考えながら、筆者の考えと、見沼通船堀及びパナマ運河の事例との関係を捉えている。★ 〔態度①〕既習の説明文との共通点や相違点を考えようとしている。</p>
⑤	<p>◇説明文の書き方について、比較・分類しながら捉える。 「終わり」の書き方を比べてみよう。</p>	
⑥ 本時	<p>◇説明文の書き方について、比較・分類しながら捉える。 「終わり」の書き方を比べてみよう。 既習の説明文(「終わり」なしも含める)を提示し、比べて気付いたことなどについて交流する。 ・「終わり」の書き方を比較し、種類があることに気付く。</p>	
⑦	<p>終末：単元全体を振り返る</p> <p>◇単元の学習全体を振り返る。 『川をさかのぼる知恵』の学習でついた力を振り返ろう。 ・事前調査と同じ問題に取り組み、図と文章を結び付けて読むことや、説明の仕方に種類があることについて振り返る。 ・これまでの自分の考えと変化や深まりがあったかななどの視点で振り返る。</p>	<p>観察・ワークシート・事後調査 〔思・判・表①〕説明文の構造や特徴に気付いている。★ 〔思・判・表②〕『川をさかのぼる知恵』の内容や、説明文全体の書き方に着目して、感想や考えをもっている。★</p>

### 3 本時の学習

#### (1) 本時の目標

既習の説明文と比較し、分類することを通して、説明文の構造や特徴について気付くことができる。

#### (2) 本時の展開(7時間扱いの6時間目)

学習内容と主な学習活動	研究との関わり・留意点
1 前時までの復習 ・習ってきた説明文の「終わり」を参考にして、『川をさかのぼる知恵』の「終わり」を考えてきたよね。  2 『はたらくじどう車』『きつつき』『さけが大きくなるまで』を提示する。 ・これまで習ってきた説明文は、他にもあるよね。 ・今までの4つと比べて、書き方は同じかな。	・『川をさかのぼる知恵』の「終わり」の筆者になるために、既習の説明文の書き方を読んできたことを確認する。  ・これまでの4つの説明文と比較して本時の問いをもつ。
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">             色々な説明文の「終わり」を比べてみよう。           </div>	
3 与えられた複数の説明文と「終わり」の書き方を比べる。(個人) ・これまで参考にしてきた4つは「終わり」があるけど、『川』や『じどう車』にはない。 ・『さけ』は「はじめ・中・終わり」という感じではないような…。 ・『きつつき』も「終わり」がないけど、『川』や『じどう車』と同じ仲間ではないと思う。  4 考えを全体で共有する。(ペア→全体) ・『はたらくじどう車』と『川をさかのぼる知恵』は「終わり」がないという点で仲間だと考えた。 ・『きつつき』や『さけ』は、それぞれについて順番に全体で説明しているから仲間。  5 説明文の書き方を体系化する。 ・「終わり」があるものかないもの、さらに説明文全体で順番に言いたいことを説明しているものがあったね。 ・こういった書き方の種類があるのだね。 ・「終わり」がないグループは、「はじめ」に言いたいことがまとまっているね。	◇俯瞰できる既習教材の提示 <div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <b style="color: white; background-color: #800080; display: inline-block; padding: 2px 5px;">研究視点 2</b>              ・俯瞰教材に注目させることで、「終わり」の書き方について児童の気付きを生む。           </div> ◇評価規準と指導の手立ての具体化 <div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <b style="color: white; background-color: #800080; display: inline-block; padding: 2px 5px;">研究視点 3-1</b>              〔思・判・表①〕              観察・ワークシート (本時-3)              説明文の構造や特徴に気付いている。  <div style="text-align: right;">C(1)ア</div> </div> ・既習の説明文をこれまでとは違った視点(構造や特徴)で捉え直す。
6 まとめ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; width: fit-content; margin-left: auto; margin-right: auto;">             「終わり」の書かれ方に着目すると、説明文の書き方には、しゅるいがあることが分かった。           </div>	
7 振り返り ・今まで気にしていなかったけれど、説明文を比べてみると、書き方には種類があった。 ・これから、どの種類なのか気にして説明文を読む。 ・この他にもまだ習ってきた説明文があるね。これらの種類も考えてみたい。	

#### ◇授業の見所・本時で願っている児童の姿

これまでに読み取ってきたそれぞれの説明文の「終わり」について比較、分類することを通して、説明文の構造や特徴について気付く姿。

## 4 授業の実際

### 大小様々な問いと共に進む単元構成及び問いを生む工夫

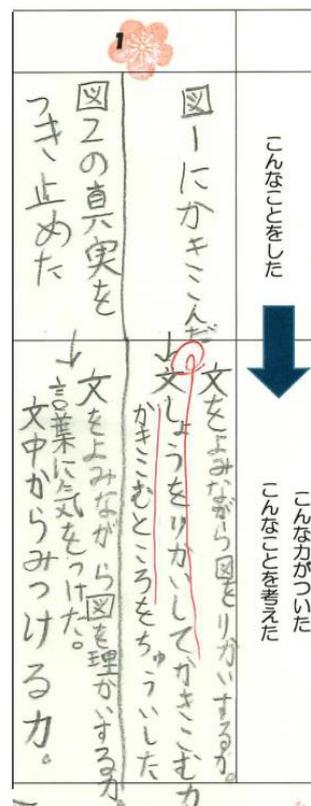
言葉の力を育てるためには、児童自身が、疑問や明らかにしたいという思いと共に学習を推進していく必要があります。また、学習を進めていく中でうまくいかない場面に直面したとき、どのように解決することができそうか、自らの学習の調整を図りながら学習を進めていくことが重要だと考えました。

本単元の導入では、教材の一部の図や文章を見えないようにして提示しました。すると、児童は「難しく理解できない」「今までの説明文は写真や絵があったのに…」という反応を示しました。

そこで展開1(1～2時)で教材の図を提示し、図の有無による違いを考えさせました。そうすることで「図があった方が分かりやすい」という図の効果を実感していました。さらに、図の情報を隠したり、誤ったものにしておいたりすることで、違和感をもたせ「この図の真実を明らかにしたい」という思いを抱かせながら、図と文章を結び付けて読むことができるようにしました。A児は「文を読みながら図を理解する」「文章を理解して書き込む」など、図と文章が関連し合うことについて捉えました。

同様に、展開2(3～6時)では全文を提示しました。すると1～2時で文章の構造に着目することを知ったことにより、それまで「はじめ・中・終わり」と捉えていた説明文の構造に違和感をもち始め、「『はじめ・中・中』なのではないか」「でも今年学習した説明文はどれも『はじめ・中・終わり』だった」などといった疑問が生まれました。そして、どうしたらこの疑問を解決できそうか考えたり、「この説明文の『終わり』はどうなるのだろう」という新たな問いを生み出したりしていきました。

このように大小様々な問いを位置付ける単元構成や、教材の一部を見えないようにする発問の仕掛け及び工夫によって、児童自身が問いや、それを明らかにしたいという思いと共に学習を進めることができました。



【A児の展開1の振り返り記述】

### 活用できる言葉の力を育む指導～既習と未習をつなぐ学び、指導事項の活用



【既習教材を俯瞰できるカード】

児童は「終わり」がある既習の説明文を読み比べることで、説明文の「終わり」の書き方の特徴を見付け、それらを参照しながら『川をさかのぼる知恵』の「終わり」を書く活動を行いました。また、本時では「終わり」がない既習の説明文を仲間分けすることで、「『終わり』がある説明文もあれば、ない説明文もある」という結論を導きました。

活用できる言葉の力を育むためには、教材内容の学びに留めず、教材での学びを教材間でもつないでいくことが大切だと考えました。

今回は、展開2の説明文の「終わり」に着目した問い(「『終わり』はどうなるか」・「『はじめ・中・中』なのか)を明らかにする手立てとして、既習の説明文を俯瞰できるカードの形で提示しました。

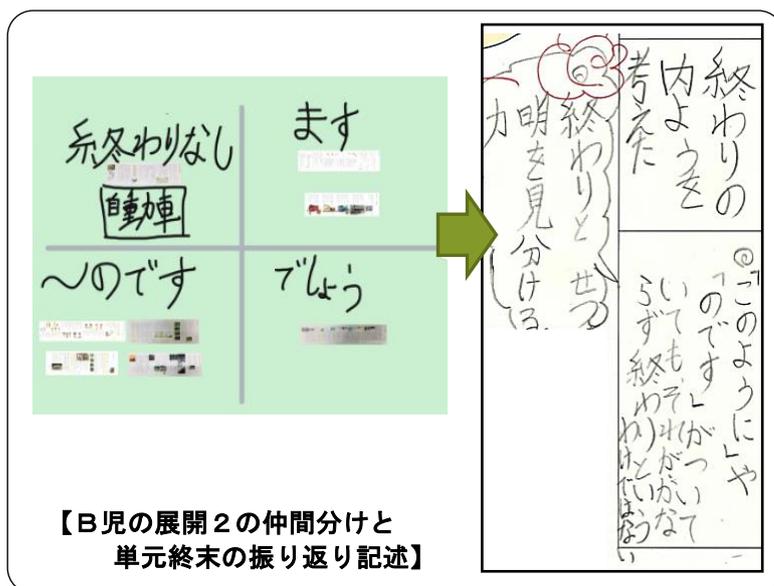
児童は「終わり」がある既習の説明文を読み比べることで、説明文の「終わり」の書き方の特徴を見付け、それらを参照しながら『川をさかのぼる知恵』の「終わり」を書く活動を行いました。



【「終わり」に着目した既習説明文の仲間分け】

B児は最初、「終わり」で使われている文末表現に注目した小さな視点で仲間分けを行っていました。しかし、友達との交流を通して、「中」での説明を受けたまとめが「終わり」であるという文章全体の構造に着目して新たな気付きを得ました。

本時の終末には「説明文をこのように読んだことはなかった」「これから説明文を読むときにも考えたい」など、既習をつないできたことで、新しい視点での読みを開拓し、未習の説明文追究への意欲が感じられる声が上がりました。



【B児の展開2の仲間分けと  
単元終末の振り返り記述】

## IV 2年次研究の成果と課題

2年次研究では、「大小様々な問いと共に進む単元構成及び問いを生む工夫」「活用できる言葉の力を育む指導～既習と未習をつなぐ学び、指導事項の活用」を重点として研究を進めました。

### 1 研究の成果

- 図や文章の一部を見えないようにしたり、誤ったものに差し替えたりして提示することで、図の効果を実感しながら、文章と結び付けて読む意識を高めることができました。
- 全文を俯瞰できる既習教材の提示によって、文章の内容や言葉といった小さな視点での読みから、文章全体の構造や特徴に着目した読みに迫ることができました。
- 学習の柱に沿い、大小様々な問いを意図的に設けることで、児童自身が明確な目的意識をもち、追究意欲を維持しながら学習を進めていくことができました。

### 2 今後の課題

- 既習と未習をどういった観点を通してつなぐことで、汎用性のある言葉の力にしていくことができるのか、学年や発達段階の系統を踏まえながら計画していく必要があります。
- 比較や分類における、より有効な思考ツールについて明らかにしていく必要があります。

## V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 国語編 文部科学省 東洋館出版社 平成30年2月
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 国語】  
国立教育制作研究所教育課程研究センター 東洋館出版社 令和2年6月
- 初等教育資料 No. 989 「学習評価の改善と指導の充実①」  
文部科学省 東洋館出版社 令和2年1月
- 初等教育資料 No. 992 「新学習指導要領における指導のポイント [国語]」  
文部科学省 東洋館出版社 令和2年4月
- 子どもと創る国語の授業 No. 69 全国国語授業研究会 東洋館出版社 令和2年8月
- 小学校国語 説明文の授業技術大全 二瓶弘行・青木伸生 明治図書出版 令和元年8月